

ナイチンゲールの看護・福祉思想

—『カイゼルスウェルト学園によせて』を手掛かりに—

広島文化学園大学看護学部・看護学研究所
佐々木 秀 美

要約

本稿ではナイチンゲールの生涯において、自身の主張と対立する家族との闘いのさなかに実行したドイツの『カイゼルスウェルト学園』での経験を参考に、行為の源としてのナイチンゲールの看護・福祉思想を検証・検討した。カイゼルスウェルト学園は、病院、更生所と教護院、師範学校、孤児院・幼児学校を付設していたが、その機能はほとんど、女性の聖務としての教区ディーコネスの訓練である。その訓練は女性たちを看護師や教育者として教えられるようにすることであり、訓練されたディーコネスは同学園の“母の家”を拠点として求められる場所へ出向し、社会貢献する事であった。それは女性の福祉のみならず、教育された女性たちによる地域福祉貢献活動である。ナイチンゲールは、『カイゼルスウェルト学園』における体験によって自身の内部にある女性の生き方に関するもやもや感を払拭し、自然法（natural law）の中で、女性にも生来与えられている自然権があるという確信を得たという事であろう。つまり、女性の幸福追求権は、女性の福祉に関する事であり誰にも与えられた平等の権利であるという事である。それは、ナイチンゲールの有する人権思想に基づいた人道主義的思想を背景に、実際に起きている現象を科学的な根拠を持って観察し、認識するというイギリス経験認識論が統合され、彼女自身の科学的な姿勢となり、看護・福祉思想の原点になっていると考える。

キーワード：ナイチンゲール、地域福祉、自然法、女性の幸福追求権

■ はじめに

“女性が輝く社会をつくる”は、安倍晋三内閣総理大臣の初心表明である。平成11年成立の“男女共同参画社会基本法”は女性の人権を保障し、戦後成立した平和憲法でもその人権思想は男女の別を規定しているわけではない。しかしながら、我が国のみならず世界の至るところで価値観の相違、宗教・信条の相違などで今尚、男女の性役割が存在し、明らかな人権侵害とみられる問題は存続している。女性の精神的・社会的・経済的自立は女性の幸福追求に関わる事であり、総じて女性の福祉問題である。

ナイチンゲールの著作『カイゼルスウェルト学園によせて』¹⁾は、1851年に執筆されたナイチン

ゲールのカイゼルスウェルト（Kaiserswelth）学園における見聞録である。著作の冒頭の“19世紀は女性の世紀”という言葉、それは一般にジョン・スチュワート・ミル²⁾の言葉として有名である。しかし、19世紀は女性の世紀という言葉の真の実現はナイチンゲールに始まったと言えよう。筆者のナイチンゲール関連研究が『ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ』³⁾他複数の論文^{4,5,6,7,8,9)}で報告したようにナイチンゲールの視点は絶えず、女性に向けられていた。カイゼルスウェルト学園は、1837年にテオドル・フリードナー牧師¹⁰⁾によって設立された施設である。同学園は“婦人執事”（ディーコネス Deaconess）という病人や貧乏な人々への奉仕活動をする婦人団体の組織であり、ディーコネス達

の活動の拠点でもあった。ナイチンゲールが著作『Cassandra/Suggestions for Thought』¹¹⁾で記述している様に、イギリスではエリザベス・フライ¹²⁾がこうした組織を通じて既に活躍していた。そもそも、福祉国家思想そのものは18世紀のイギリスや、ドイツ絶対主義国家のなかで形成されたと言われる。ドイツのクリスティアン・ヴォルフ¹³⁾は、福祉助成の理念によって、高権的な警察国家における福祉国家を提唱し、イマヌエル・カント¹⁴⁾は、国家依存ではなく公共性に依存した福祉を提唱した。国民の幸福という思想に立脚すれば、国家依存ではなく公共性に依存した福祉も必要であるが、国家的な立場からも、国民の生命と財産を守るという双方向の制度が求められる。カントの哲学における存在としての人間の価値がそこにあり、人間として自己決定を有する無限なる存在としての人格が、人間社会の中で相互に尊重される存在となりえる。

筆者は既に『ナイチンゲールと社会福祉論—看護は芸術である』¹⁵⁾で、イギリス国家の貧困対策問題に言及し、地域福祉という一般概念、人権思想と地域福祉、イギリス社会における社会的問題と弱者救済活動及び救済の為の制度、そして、ナイチンゲールの地域福祉への貢献活動について論究した。地域福祉の考えは人々の幸福追求の自由と平等思想に立脚しており、男女の別なく人間が生まれながらに有している人権思想である。福祉の基本理念はそうした人権思想に基づくものである。人権思想が自由・平等・健康・幸福の追求にあるとしたら、人々が暮らす日常生活においてこれが実現されなければならない。男女間の不平等改善のための女性の権利運動、20世紀は子どもの世紀で始まる子供の権利擁護、社会における障害者の取り扱いに関する問題等は、個別と言うよりも、それぞれが相互に重なり合う公共の福祉、すなわち、社会集団に対する福祉思想の実現である。ナイチンゲールの地域福祉に向けた取り組みは、人々の健康という概念を主軸にしながら、全ての人の幸福実現に向けた取り組みであり、人権思想に基づいた弱者救済活動である。

著作の解説文には「全編に若い情熱とみずみずしい感動がいきわたっており、事実の観察と記述は克明であり、他の著作には見られない話題が素直な筆づかいで述べられており、当の学園の有様が目に見えるようであると記されている。そして、生涯の転機をむかえたナイチンゲールの若々しい

感受性が察せられて興味深い」¹⁶⁾とある。その解説文から考えるとナイチンゲールは、現状把握においては、極めて観察力が高く、現象学的・解釈的な手法と実証哲学的要素が高い人物であったと考えられる。ドイツの福祉政策の歴史においても、彼女が学んだカイゼルスウェルト学園がどのような目的や位置づけであったのかは実に興味深い問題である。

筆者もこれまでのナイチンゲール関係の論文に『カイゼルスウェルト学園によせて』を参考・引用したが、直接的に本施設とナイチンゲールとの関係において論じて来なかった。山岸仁美等(2003)らは、『ナイチンゲールにおける看護学教育の源流—カイゼルスウェルト学園によせてより—』¹⁷⁾で、同学園での経験がナイチンゲールの看護教育の源流であると報告している。実際、ナイチンゲールの著作『カイゼルスウェルト学園によせて』をじっくり読めば、後のナイチンゲールの行動との関連において看護のみならず、彼女の福祉思想が明らかになる。そこで、本稿ではナイチンゲールの生涯において、自身の主張と対立する家族との闘いのさなかに実行したドイツの『カイゼルスウェルト学園』での経験を参考に、自身の人生の目的を見出したプロセスを通して、行為の源としてのナイチンゲールの看護・福祉思想を改めて検証・検討する。

I. カイゼルスウェルト学園での学びまでの道程

『ナイチンゲール—精神的危機から自立へのプロセス—真実の目は真理の探究につながる』¹⁸⁾でも報告したように、自分が看護師になろうとの意を決し、家族にその決意を打ち明けた20歳のその瞬間から、家族との対立が始まった。その期間が延びるにしたがってナイチンゲールの精神は危機的とも言える状況になった。その彼女の状況から、自立できるまでの13年間の悲痛の体験は、上流社会の女性に与えられた伝統的社会規範への抵抗によるものであった。その規範によれば、女性は結婚して家庭内にとどまるべきであった。無力な弱者として男性に支配、あるいは保護される代わりに、自分の人生に決定権を持たない女性の生き方は、ナイチンゲールにとって苦痛以外の何ものでもなかった。「いったい何の為に、他人の目、他人の勝手な期待、他人の意見などに悩まされる必要があるのでしょうか。自分のやりたいことをやらないで、他人から言われるままに生きた人で、

優れたこと、有用なことを成し遂げた人は、いまだかつて誰もいないのです。』¹⁹⁾とナイチンゲールは述べている。

それは女性のライフサイクルや幸福追求権の問題である。家庭生活における自身の体験を悲惨と感じたナイチンゲールは『Cassandra/Suggestions for Thought』で宗教的要素を前面に論じつつ、家庭生活を非難した。彼女は、このような状態は神の望みではない。神のなさる事が完璧であってしかも、女性達が何もしないでいるようにできているのであれば、彼女の考えでは、女性達はこれを受け入れるように作られているべきで、不安な感情など起きるはずがなかった²⁰⁾。

自己希望実現ができず、精神的危機状況に陥ったナイチンゲールを救ったのは、ドイツのカイゼルスウェルト学園での学びの体験である。実際、ナイチンゲールがカイゼルスウェルト学園に学ぶ機会が得られたのは、友人のミセス・ブレスブリッジ²¹⁾によってである。彼女の精神状態を心配したブレスブリッジ夫妻は、1847年にまず、ローマへの旅に彼女を連れ出した。この旅行では、新たにシドニー・ハーバート²²⁾夫妻と知り合いになった。彼等はナイチンゲールが看護師になりたいという意志を伝えると大いに感激し、必要な時は協力を惜しまないことを約束してくれた。幸運にもシドニーという人はトーリー党に属している政治家であり、彼の病院の状況改善に関する強い関心はナイチンゲールの目的とも一致していた。この旅でナイチンゲールの病んだ精神はすっかり回復した。しかし、家族の下に戻り、家族の執拗な反対に闘いを挑むとき又、彼女は病みはじめた。ブレスブリッジ夫妻は1849年に再び、ナイチンゲールをエジプトやギリシャを巡る旅行に連れ出したのである。そして、この旅行の終わりにナイチンゲールをドイツのカイゼルスウェルト学園へと向かわせた。

ナイチンゲールは、ドイツに看護師の教育を行っている施設があることを、ブンゼン・ヨジラス男爵²³⁾から送られてくる資料によって知っていた。ブンゼン男爵はプロシア大使であり、ヴィクトリア女王やアルバート殿下²⁴⁾の友人でもあった。ナイチンゲールが彼と初めて出会ったのは22歳の時であり、それは、女王夫妻主催の晩餐会においてであった。ブンゼン男爵はそれ以降、ナイチンゲールにカイゼルスウェルト学園の年報のみならず、病院の衛生に関する諸外国の資料を送付

した²⁵⁾。ミセス・ブレスブリッジは、友人のメアリー・クラーク・モール²⁶⁾を通じて知り合った女性である。夫のブレスブリッジ氏は、ギリシャ解放運動に傾倒している人物であった。思いがけない友人達の計らいでドイツのカイゼルスウェルト学園に学ぶ事ができたナイチンゲールは、その繊細な観察力と洞察力で同施設の教育を見聞することができたのである。ナイチンゲールは学園の「キリスト教的愛のやさしさや明るさ繊細さ、一口に言えば、道徳的雰囲気」²⁷⁾に魅了された。ともかく短期間ではあるがこの学園での質素で堅実な生活は、ナイチンゲールの磨り減った精神をすっかり健常にした。この経験は女性にも職業を与えれば神経症にならず、生き生きと暮らせるのだという確信を彼女に与えたであろう。

それでは、カイゼルスウェルト学園でナイチンゲールが見たり聞いたり実践したり調べたりしたことは何か。まず、最初に目につくのは“19世紀は女性の世紀”となるにちがいないという冒頭の言葉である。この言葉が著作全体の論旨を示しており、それは、女性への関心であると考えられる。次に、女性の為の神の仕事としての“婦人執事”(ディーコネス Deaconess)の歴史概観とカイゼルスウェルト学園の設置についての歴史概観へと論が進む。最後に各論としてこの論文の主要テーマであるカイゼルスウェルト学園の施設説明を1. 病院とディーコネスの母の家、2. 刑期を終えた女性のための更生所と教護院、3. 「教区」とディーコネス、4. 師範学校、孤児院そして幼児学校について丹念に調査したあるいは観察した内容を丁寧な論述し、結論的論述では“オールド・ミス”へのエールとも言える内容である。『看護覚え書』²⁸⁾でも述べたように女性達が目的に向かって行動することこそが重要であると説く。

II. 著作『カイゼルスウェルト学園によせて』

1. 自身の生活設計は自身の手で

女性が一人の人格として尊重される事、これは重要な問題であった。ナイチンゲールが、なぜ、女性達は抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性達は創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか?との疑問を持ったのは、1846年のことである。ナイチンゲールは、この時代ほど女性がその能力を開発する自由ばかりでなく、その機会を与えられている世紀はかつてないのに、「行動のための女性の

教育は知識のための教育と足並みをそろえていない。』²⁹⁾と述べた。それはナイチンゲールが観察した当時の女性達の姿であったろう。しかし、他方においてイギリスでは、“女性の権利 (Woman's Right)” 運動も展開されていた。その運動は、18世紀のフランス革命以降、女性が平等に取り扱われていないことに気づいたフランスの思想家達中心の活動がイギリスに広まったものであった。

まず、18世紀後半、フランスのオランプ・ドウ・グージュ³⁰⁾の『女性の諸権利』³¹⁾という小冊子には、女性及び女性市民の権利宣言が成された。その前文には母親・娘・姉妹達、国民の女性代表者たちは、国民議会の構成員となることを要求する。そして女性の諸権利に対する無知、忘却または軽視が、公の不幸と、政府の腐敗の唯一の原因であることを考慮して、女性の譲り渡すことのできない神聖な自然的権利を、厳粛な宣言において提示することを決意したと述べられ、法のもとに女性も男性と同じように平等であることを主張した。女性が男性同様法的権利を有するという考えは、危険思想であるとのことでグージュは処刑される。しかし、処刑に際してグージュは、女性も罪に服する義務があり、そこに男性と同じく権利を有するのだとのことであり、毅然とした態度で処刑を受けたと同著には記述されている。グージュにおける権利は義務とワンセットであり、それは決して弱者として保護されたりするような立場ではなかった。

1792年に、イギリスのメアリ・ウルストンクラフト³²⁾は『女性の権利の擁護』³³⁾の中で、イギリスの市民革命に思想的な役割を果たしたジョン・ロック³⁴⁾の理性による教育を女性にも適用すべきと主張し、男女間の不平等を指摘した。こうした不平等を取り除くには、女性も職業に就くことが大事であると述べ、女子教育の無視こそがこの現実の根源であると述べている。ウルストンクラフトは、女性は医学を学んで看護師のみならず、医師にもなれると述べ、職業をもって働く女性の貴い価値について言及した。家庭内の男女の不平等についてはサン・シモン主義者であり、功利主義者であるジェレミー・ベンサム³⁵⁾が“女性の幸福と利益は男性のそれと同等である”と述べ、女性の立場を擁護した。しかし、一般的にはフランスのフランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モード・フェヌロン³⁶⁾が提唱した良妻賢母主義教育が中心であり、良き妻善き母になる

ことが理想的な女性の生き方であった。女性の権利運動が高まりを見せる中、1832年、イギリス国会の第一次選挙法改正において婦人の参政権問題が取りあげられたが、女性に参政権は与えられなかった。しかし、ミルは妻であるハリエット・テラー³⁷⁾の影響を強く受け、ますます、女性解放運動に傾倒していった。

クリミア戦争後、陸軍の改革中に、ナイチンゲールとミルとの間に論争があった。一つ目は、“女性の権利”運動に関することであり、二つ目は、参政権運動についてである。論争一つ目は、ナイチンゲールが『看護覚え書』に、現代に置ける2つのたわごと (Jargon) として、まず、女性にも男性同様の権利が与えられるべきと単純に考えるのは、ばかげた事である、そうした職業が女性に適任の仕事であるかどうかよく考えよ。次に、女性には男性のする仕事は一切させないとする良妻賢母主義思想に基づく考えについて言及し、いずれにしても女性達は己の信念と使命に基づいた行動を黙々とすべきだ³⁸⁾と書いたことである。問題は、この記述が“女性の権利”運動を批判しているとミルが考えたことにある。ミルは“男女同権”に関するナイチンゲールの見識に対し、“女性の権利”運動は許されて良いものである。女性に対する偏見によって、これらの運動が一方的に排除されることは好ましくない³⁹⁾とエドイン・チャドウィック⁴⁰⁾に書き送り、ナイチンゲールに直接注意し、さらに、この部分を除外するように言ってほしいと依頼した。この点に関してナイチンゲールはミルの解釈の一部を受け入れたが、ミルの方が正しいと認めるつもりはなかった。二つ目の“女性の参政権”問題では、ミルが、女性に参政権を与えれば、女性の問題は女性自身で解決できると考えたが、ナイチンゲールは、現時点では女性の教育は不十分であるから、参政権を与える前に女性に十分な教育をするべきであると考えたことが両者の対立であった。

陸軍の改革中のナイチンゲールに対し、1855年に陸軍に女性を導入することに反対して提出された“秘密報告書”に対してもナイチンゲールは言及を避けつつ、「この仕事は多くの障害のもとに遂行されたのであるが、中には不可避のものもあれば、避けようと思えば避けられたものもあった。深く遺憾に思うものもいくつかあったと述べ、修道尼たちとの間に起きた抗争事件や看護師たちの泥酔事件などは組織の面目を傷つけるもので

あった。又、虚栄と饒舌と不服従のために、どんなに実務的に役立つとも女性にはこの仕事は不適で有害であるとの世評が正当化されることになる。⁴¹⁾と述べた。一方ではクリミア従軍中の内部スタッフから、他方では外部からの匿名の攻撃に対して説明を加えたり、回避したり激しく抗議したりした。1858年にハリエット・マーティノウ⁴²⁾に宛てた手紙に、あることない事を書き散らす女性達に対して「女性のインク壺 (Female ink Bottle)」⁴³⁾と強く非難した。加えて、ナイチンゲールは、最近、小説家や説教作家たちが“オールド・ミス”をほめそやし、結婚を全女性の本分 (Vocation) とみなす愚かさについて述べたことについて痛烈に指摘した。小説家や説教作家たちが、独身生活は結婚生活と同様であると言い切ったりしてそれが流行にさえなっているが、これは、魚にとって空気はその中での棲み方を知ってさえすれば、水の中と同様に棲みよいものであるというのと同じ理屈であるとナイチンゲールは述べ、オールド・ミスであることを女性が恐れているとしてもそれは当然のことと思われる述べた。それは結婚の華やかさへのたんなる愚かな望みではないということである。そして、ナイチンゲールは、“愛のない生活と目標のない活動”は考えただけでも恐ろしく、現実においては退屈極まりないものだからであると書き、なんと多くの女性達が、特に夫を愛しているというわけでもないのに、ごく自然な目的のために、つまり自分の活動の場を見出すという目的のために結婚してきたであろうか。なんと多くの女性達が、健康を害しているとか格別することがないということのために苦しんでいることであろうか⁴⁴⁾と書いた。

1839年、ロバート・オーウェン⁴⁵⁾は『結婚・宗教・私有財産』⁴⁶⁾で、愛情などは決してなかったか、また、愛情が当分はあったかもしれないが失われてしまったような両親の子孫、富や地位のため行われた人為的な結婚、また、この国の僧侶によって最も非合理的につくりあげられ、富裕な人々以外は解消不可能な結婚、この不自然な方法によって生まれた子どもたちは、合法的かも知れないが、両親間の愛情や純潔の欠乏のゆえに、心身ともに病みかつ不完全であると述べた。彼は、子ども達の性格形成論に関する限り、それは当時の社会がもたらす弊害であり、特に不自然な形の結婚が無知、貧困、悪徳、犯罪などの悲惨さの温床であると考えた。彼によれば、結婚は神が許し

た善である⁴⁷⁾。しかし、その善は夫婦の肉体的結合が子供を産み育てるという目的の手段として、あるいは、夫又は妻の欲情が罪を生み出すのを阻止する手段としての価値しか持たないがゆえに下位の善である。しかし、そこに霊的結合があれば、それは上位の善であるとした。男女が互いに愛し合うこと、つまり、それは精神的な結びつきによることが多い。しかしながら、それが家族制度の中では、結婚は家族を維持する一つの方法でもあった。また、他方、互いの物質的満足のためであるということもある。

ナイチンゲールが看護師になって人々の役に立ちたいと考えて家族にその意志を打ち明けたのは1840年のことであり、彼女が20歳の時である。ナイチンゲールは、宗教的概念を強く強調しながら、“伝統的な社会”の冷酷な現実の中で、伝統的な規制に女性が服従している無意味な生活を繰り返し述べ、女性が自己の生活も調整できないで、心霊的にも精神的にも貧弱な生き物になっていると指摘した。そして、女性達は「家庭内の白色奴隷」⁴⁸⁾であると述べた。男性にとっても女性にとっても、家庭は不滅の精神の発展する場としては狭すぎると述べ、その小さな範囲では、不滅の精神を持った人が、創造主から授かった資質や才能によって運命づけられている仕事を行う機会は万の一つもない⁴⁹⁾と述べた。家庭は創造主から授かった能力を使う場ではなく、天職として神が授けたその能力を使う機会もないと家庭生活を非難しながら、ナイチンゲールは現時点において女性の知性は満足できないものであると告発し、幼児期にそうした強制不能な精神が形成されると言及した。家庭生活を非難しながらナイチンゲールは、結婚に対して、「男性と女性との意志疎通結婚、それはなんと軽々しくて、また尊敬に値しないことでしょうか。結婚を真の女性の天職、女性の素晴らしい仕事だと呼べるでしょうか。」⁵⁰⁾と述べている。彼女は、中産階級では、自分が父や兄弟にわずらわしい存在になっていると感じ、夫を見つけることもなく、また女教師になる教育も受けてはいず、途方にくれている女性がなんと大勢いることか。未婚のまま生活する多くの女性がおり、未婚のまま人生のみのりの時期を越した多くの女性がおり、また知的な仕事が人生における彼女の目的でもないならば、心身ともに病気のない女性なら誰でも感ずる行動—有益な行動—へのあの渴望をどうしたらよいのであろうか⁵¹⁾と述べた。

「神が創造し給うたものに無駄なものは何一つない。」⁵²⁾と考えたナイチンゲールは、1852年に父親に宛てた手紙に、若い頃の未経験故の失望について語る時、私はいまではやむをえない事としてそれを消極的に耐えるのではなく、無限の知恵、そのものである神の美しい取決めとして積極的に受け入れることをお伝えしたいと思います。そうした取決めは私たちが神のように新たに創造することは有り得ませんが、さりとて動物にすることでもありません。それ故、人間が自身の経験によって人間らしくあるようにという神のご意志、これは誰も逆らうことのできない完全に善なる神のご意志である⁵³⁾と書いている。既にオールド・ミスと呼ばれる32歳の誕生日を機にナイチンゲールは、自己の存在感を認め、生きるという実感を味わった。自身の経験から人間らしくあれという神の言葉は、ありのままの存在を認める人間存在の問題である。自分に与えられた環境に居つつ、その環境を打破し、自己の将来に向けてその道を切り開くことであった。“たたけよ、さらば開かれん”は神の言葉であり、神のご意志であった。ナイチンゲールは自己の環境の中で、見えざる世界の神との交流の中で、一つの結論に至ったのであろう。

2. ナイチンゲールが観たカイゼルスウェルト学園設立の経緯

ナイチンゲールは、デュッセルドルフに近いライン側ほとりのカイゼルスウェルトにあるフリードナー牧師の学園は良く知られているから、その始まりの歴史は、おそらく興味深く思われるであろうという書き出しに始まってその学園の設立経緯について説明している。彼女の説明によると同施設は、他の施設のよくある設立の仕方、当時で言えば、王や貴族の名を筆頭とする寄贈者や有名な委員会の、規則や法規を物々しく制定しながら造る新しい施設とは全く異なっており、必要に応じて継ぎ足したり付け足したりしているようである。

彼女によれば、平和を取り戻す数年前、ローマ・カトリックの小都市であるカイゼルスウェルトにある製造所ができ、おもにプロテスタントの労働者の一群がここに集まってきた。1822年には、製造業者が破産したためにフリードナー牧師は援助してくれる支持者を失った。その時22歳であった牧師は、教区の世話をしていたが、彼らを見捨て

ようとはしなかった。1823年とその翌年には、自分の小教区の教会を維持するためにオランダと英国に旅をして資金集めをした。英国ではフライ夫人と知り合った。フライ夫人は、1812年に裁判を待っている者たちが入所しているニューゲート刑務所を訪問した際に、その不衛生な悪条件の環境を目のあたりにした。そして、最も重要なことはその施設が、犯罪者が更正するための施設ではなく、囚人を悪い習慣に陥せるような施設だった事である。彼女の改革は、犯罪者の再犯を防ぎ、彼らが自尊感情を得るよう支援する必要があると感じたことによる。

フリードナー牧師も罪を犯した女性達について、彼女たちが往々にして生計の手段が見つからないので、言ってみれば強制的にふたたび罪を犯さざるをえない女性達の状態が、いかにみじめであるかにまもなく気づいた。刑務所が改心のための更生施設ではなく、悪徳のための更生施設にさえなっているという事実によりフリードナー牧師の関心は向かった。1826年に彼は、ドイツのデュッセルドルフではじめて刑務所規律を改善するための協会を作った。1833年に報酬なしでその運動に参加してきた服役をすませた一人の女性とひとりの志願生と共に、自分の庭のそまつな小屋でその仕事を始めた。ナイチンゲールが見聞した時代には、当初のみすぼらしい小屋から幼児学校の隣に移転して建物が大きくなっているようであった。現在では幼児学校へのびる農場と付属学校を備えた広大な庭と広場がうしろにできていた。

1833年12月に製造所の中に病院を設立した。それは、ひとつには有能な看護師が非常に不足しているのを感じて、またひとつには有能な女性の能力が無駄にされているかを見て残念に思い、また初期のころの学園に志願した者が自分の技能を養うために、さらに広い分野を求めたことが発端であった⁵⁴⁾。病院はおもにディーコネスを訓練する目的で設立され、あらゆる種類の病人が受け入れられたこともあって、その年の治療率は大変良いというわけにはいかなかった。その学園で看病を受けた患者の数は60人にもものぼり、自宅療養の28人も彼女たちの看護を受けた。最初の1年間で看護師の志願者の数は7人に増え、このひとたちは6ヶ月の見習い修業についた。病院設立当時の看護師で、今なお現職として働いているのは、ディーコネスになったライヒャルトである。高齢になったライヒャルトは、体力の衰えのために今では身

体を使う介助は十分にできないが、世話は献身的であり、極めて貴重な働きをしたので男性の患者は彼女を母とみなしてさえいる。また彼女は見習い生や若年のディーコネスに指示を与えたり、助言をしたりすることにおいても大きな貢献をしているようであった。

病院の裏に付属した建物のある大きな囲いに中庭があり、そのうしろに患者が利用するのに適した壁で仕切られた1エーカーばかりの庭がある。そこからひとつづきの建物をフリードナー牧師が借り受けている。その中にこの学園が設立された時からのさまざまな部門が含まれていた。その部門の第一は幼児学校であって、右側に位置し、そこには40名の子供たちと幼児学校の女教師となるための訓練を受けているほぼ同数の若い女性達があった。これらの人々は必ずしもディーコネスになろうとしているのではなく、大部分の者は独立することを望んでいた。幼児学校は、1836年には設立された。幼児学校では第一級の女教師ヘンリエッタ・フリッテンハウスが指導にあたった。彼女は幼児学校の女教師の聖務につきたい400人以上の志願生を訓練してきた。

次に孤児院である。そこは2家族になっておりそれぞれに12人の孤児がいる。主として孤児は牧師や校長やそして他の尊敬すべき両親の娘たちであって、めいめいのディーコネスと一緒に住んでいる。ディーコネス達は担当を任された子供たちを親身になって世話し、一緒に眠り、一緒に食事をして、家庭生活の中で彼女たちを教えている。この施設は、これからディーコネスや教師になろうとするひとたちのための訓育の土壌となることが期待されている。孤児院に付属して授産学校、昼間学校そして幼児学校の女教師のためのセミナリティ（師範学校）がある。ここで彼らは第一級の教師や幾人かの優秀な女教師から（孤児院、幼児学校、教区の昼間学校、また病院の中の小児病棟をひとつずつ回って）教えることを学ぶ実践的な教育と、自分たちに必要なあらゆる部門の理論的な教育を受け、そして教師自身と牧師補とからは宗教的な教育を受けた⁵⁵⁾。これらすべての施設のための浴場はライン河にあり、“るいれき”の子供たち (scrofulous children) はこれから非常な恩恵を受けている⁵⁶⁾。そして、並んだ家のうしろにはおよそ40エーカーの土地があって、その施設には野菜と薬用植物と、8頭の牡牛と5、6頭の馬には牧草をもたらししていた⁵⁷⁾。

カイゼルスウェルト学園は、建築家たちがあらそってやること、つまり、斬新でかつ便利な建築物を造る遠大な計画ももたないで、身近な手段と手近の建築物だけを利用しつつ、わずかな資金でいかに現在のその施設が発展し、花開いていったかという事を示している。カイゼルスウェルトのこれらの施設のはじまりが、他の施設のよくある設立の仕方—王や貴族の名を筆頭とする寄贈者や有名人の委員会が、規則や法規を物々しく制定しながら新しい施設を造る（そしてそれだけで終わる）仕方とは全く異なっていることを見逃すことはできない⁵⁸⁾。彼女は、カイゼルスウェルト学園の設立の変遷過程の検証で同学園が、貧しいながらも地域福祉という意味で真に輝かしい実践についての称賛であると考えている。

3. ナイチンゲールの“婦人執事”（ディーコネス Deaconess）の歴史検証

先述したようにナイチンゲールは、神が創造し給うたものに無駄なものは何一つないと述べ、私たちは、どのような種類の不足に対しても、神が満たし給う恩恵をいつでも見つけることができると述べ、「キリスト教のごく初期に直接に神の祭式に女性の能力を用いた使徒の制度を知っている。」⁵⁹⁾と述べた。彼女らが教会の“召使い”として奉仕に携わっていたのをみる時、女性にも神から与えられた役割があると述べた。そして、歴史検証としてナイチンゲールは引用文献に必ず（ ）内に出典を明らかにしつつ、どのような種類の不足に対しても、神が満たし給う恩恵をいつでも見つけることができると述べた。

第一に、使徒行伝に“執事 (Deacon)”をみるように、ヨーロッパ人への手紙の中に“婦人執事 (Deaconess)”についての記述がある、4世紀には、聖クリストムがコンスタンチノーブルの40人のディーコネスについて述べているのではないか。カトリック教会においては18世紀まで、ギリシャ教会においては十二世紀まで彼女たちがその役目を果たしていたのを見る (Augusti's Denkwürdigkeiten, xi. 220)。

第二に、ワルド派、ボヘミア教徒やモラビア教徒が中世の暗黒の中から現れた時、この使徒の制度を模範として作られ1457年に制定されたプレスビテレー (Presbyterae) と呼ばれる教会組織の中にディーコネスの聖務が出てくる。彼女たちの多くはそれによって単に宗教上の清廉潔白の極み

に達しようとしたのではなく、病人や子供の面倒を親身にみることができるよう独身を選んだといわれている(Mohrlen, Buch der Wahrheitszeugen, I, 301)。

第三にルッターは身のまわりに執事の聖務にふさわしい者が少ないことに不満をもらしている。そして主がそのためにキリスト教徒をお造りになるまで待たなければならないといい、さらに女性は悲哀を軽くする特別なやさしさをもっていて、女性の言葉は男性のそれよりも人々のこころを動かすと付け加えている(Luther's Works [Walch's Edition], xi. 2755, ii. 1387)。ルッターとは、ドイツで宗教改革を行ったマルティン・ルーテル⁶⁰⁾のことである。イギリスでもプロテスタント(Protestant)という彼の宗派が出現していた。

第四に、16世紀にはオランダの王子ローベルトがプロテスタント慈善婦人会の制度を復活させ、彼の領土内の鎮圧された修道院の総収入を自分のものにしないで、この目的にあてたという史実は良く知られている(Histoire de la Principaute de Seden, par Peyran, vol. ii, chaps. 1&2)。

第五に1568年にヴェッセルでライン下流国とオランダの福音教会の第一回全国会議においてディーコネスの聖務が推奨され、古典教会会議において1580年に正式に制定された。英国ではディーコネスは不足していなかった。エリザベス朝下の1576年に非国教特選奉者の中ではディーコネスが礼拝式で任命され、教区の一般祈祷式で承認された(Neal's History of the Puritans, i. 344)。

第六に、最初アムステルダムとライデンに追われその後北米に追われた巡礼始祖たちは、1602年から1625年の間に自分たちのディーコネスを伴って移動していた(Young's Chron, of the Pilgrim Fathers, Boston, p. 455)。アムステルダムでは、私たちはディーコネスが小さな樺のムチを持って教会の自分の部所に座り、いかに子ども達をしつけたかを、またいかに彼女たちが病気の子も達を見舞って世話したか、さらに彼女がイスラエルの母のように、いかに人々から慕われていたかを読むことができる。

第七に1633年にヴァンサン・ド・ポール⁶¹⁾によって修道女団の聖職(the Order of Sisters of Mercy)が制定されるずっと前でも、ディーコネスの聖務の重要性がキリスト教徒の各派によって認められていたのは確かである。ナイチンゲール

が同著にも述べたように聖ヴァンサン・ド・ポールが設立した慈善修道女会による看護の奉仕活動は、4世紀にも遡ると言われている。十字軍の出兵にあわせて行われた看護奉仕団が、そのままキリスト教伝導の目的とも相まってナイチンゲールの時代にも続けられ、女教師教育及び看護教育も行った。こうした教育の方法は“母の家(Mother house)方式とも呼ばれていた。ナイチンゲールは、あまりにも多くの人々がこれをもっぱらローマ・カトリック教会から借りてきた制度だと思ひ、そのために偏見を持っているので、私たちはさまざまな時代に、あらゆる教会の中で、そしてプロテスタント信仰のごく初期にもその聖務が存在していたことについての他の多くの立証を示す余裕をもてたらよいのと思う⁶²⁾と書いた。多くが女性の聖務についてであるが、彼女が、神がなさることに無駄なことは一つもないことの証明を、女性の聖務から歴史的に検証し論証している。

15世紀の初頭のイギリスでは、ヘンリー8世⁶³⁾が自身の離婚問題からローマン・カソリックと対立した。ヘンリー8世は信条的には、ローマン・カソリックの教義をそのまま受け継いだ形で長年のローマからの支配を断ち切り、自らイギリス国教会を作り、その長になった。ヘンリー8世によって宗教改革が行われたとは言え、教義そのものが深く研究されないまま、イギリスの宗教は存続した。ディーコネスの聖務がローマ・カトリック教会から借りてきた制度であるとの考えが、イギリスでディーコネスの聖務の普及を阻害したのか？ナイチンゲールの結論はノーであり、それはディーコネス訓育の土壌、つまり、ディーコネスの為の予備的な学校が存在しなかったからであった。しかし、プロシアではディーコネスの実際の訓練のための組織は各方面に広がっていると述べた。

4. 病院とディーコネスの母の家

病院は約100床であり、男性、女性、少年、子供の4つの部門に分かれている。子供部門には17歳以下の少女と6歳以下の男の子を含んでいる。病棟は全て小さく、女性病棟の病室は4床である。診察が行われるとき、また特別な病人の診察では、その患者は容易にその病棟を独占することができる便宜もある。個々のよい家庭と比べても、この病院ほど礼儀作法が守られているところはないし、病人たちが退院して家に帰った後もつづい

ている。ナイチンゲールの観察によれば、小児病棟のシスターは、子供たちに書物を読んで聞かせるということとはほとんどない。朝、シスターは聖書から選び出したひとつの物語を年長の子供たちに語り聞かせ、彼らとともに歌い、そして祈る。その後、年少の子供たちに聖書の中のもっとわかりやすい物語を語って聞かせ、同時に子供たちの目に訴える絵を見せて説明する。夕方になると、彼女はやはり、語って聞かせるのである。そのお話は聖書からとってきたものではなく、伝道の物語やキリスト教への帰依の歴史などから選ばれる。シスターは午後の礼拝が行われている間、無味乾燥な聖書の読み方を避け、子供たちが身をのりだして聞くようなエピソードを選び、子供たちに話して聞かせる。カイゼルスウェルトは大都市よりも環境的に大変恵まれている。ここの子供たちは庭で遊ぶが、それはひどく好きであるのと、ほとんどが腺病質なので、屋外の良い環境は彼らの健康にとって重要だからである。

男性病棟は、教育を受けた5人の看護師たちがシスターたちの指導のもとに患者の世話をしている。午後8時を過ぎると男性病棟にシスターたちは行かない。看護師たちはそこで仮眠を取り、必要の場合は寝ずにいる。シスターたちは、たとえば少年たちの病棟であっても、そこで就眠しない。個人の家で婦人が自分の兄弟たちを看病している場合を除いては、男性患者の世話をするためにシスターが夜間に呼ばれることはない。これらすべては、この雰囲気の中で訓練された、いつも信頼できかつ注意深い看護師たちの手で行われる。どんなにきびしい見方をしてみても、入院患者と外科医とシスターたちの交わりのあり方には、非のうちどころもない。

医師は病院内には住んでいない。個人の家にいる患者は、医師の訪問を一日に一度ないし二度ぐらいしか受けない。医師はその時、指導者であるが、カイゼルスウェルトでは聖職者が指導者である。しかし、シスターたちは医師の指示に従うよう義務が課せられている。そして彼女たちは十分に訓練されているので、医師の指示に従わないというようなことは起こらない。各病棟の監督の任にあるシスターは、医師が毎日行う病棟回診の際には必ず居合わせている。薬剤師はシスターであり、医師の患者回診の際には彼女も同席して、医師の処方や指示をすべて書きとめ、それを後になって、帳簿に書きつける。その病棟の監督シスターがい

るおかげで皆がにこやかに、互いに親しみをもっていて、礼儀にかなわないことは起こらないのである。シスターたちのしつけのよさは完璧である。それは、医師や患者との関係において、看護師の行動が道徳的であること、礼儀作法が理にかなっていること、看護師としての使命に対して忠実にその役割を遂行すること、これらは病棟シスターたちが十分に教育されていることの証明である。病棟シスターはめいめい自分の病棟で、朝と夕とに一同に祈り、患者たちと讃美歌を歌い、聖書とか、かの牧師が選んだ他の書物とかの、ごく短い部分を読み、そして、また祈るのが常である⁶⁴⁾。

ナイチンゲールは、「病院とは患者が多くはその健康を回復し、大概の場合、健康が増進して自分の家族達の元に帰る為の学習の場であるべきであるのに、そうではなく、病院の事情に通じている者の多くが知っている事であるが、不道徳と下品さを助長させる場であるといわれているのを私たちは知っている。それは評判の良くない女性が看護師として受け入れられ、男性の患者や若い外科医の中に立ち混じって働いているうちに、さらに評判が悪くなるという現状からは当然の事である。」⁶⁵⁾と述べ、看護師たちが酒を飲んでいるのを見たり、夜眠り込んで仕事をなおざりにしているのにもでくわしたりする。女性達が愛によるのではなく賃金のためにそのような骨のおれる仕事を引き受けているところでは、このような状態になるしかないであろう。患者が看護師に酒類を買いにやらせるのを見ることさえある⁶⁶⁾と、当時の粗悪な病院環境と看護師たちの不品行をあげつらった。しかし、カイゼルスウェルト学園では、きわめて健全な病院の管理が為されているようだ。彼女は、カイゼルスウェルトでは、誰もが同じ困窮の中にあり、同じ克己心を発揮しており、同一の目的——一つ精神、ひとつの愛、唯一の王——に連なっている⁶⁷⁾と書いた。

ナイチンゲールによれば、この施設はひとつの病院としてではなく、ディーコネスのための訓練学校としての機能が強く、修練 (probation)こそがこの大きな根本方針である。それは聖パウロが、「彼らはまず調べられて、不都合なことがなかったなら、それから執事の職につかせるべきである」と語ったと同じように、まず、志願者は、1年から3年の期間に修練されて適当とみなされたら執事の職につくことができる。修練中のシスター (probationary) は、6ヶ月間は食物と宿泊

のほかに何も受けとらない。その後、わずかな額の報酬が支給される。所定の修練の期間を務めたのち、教会で神からの祝福を受けた女性がディーコネスとなる。ディーコネスとなってもほんの衣服費くらいの報酬しか受けとっておらず、その他、食事と宿泊とディーコネスの上衣が彼女たちに与えられるすべてである。従って、この仕事に関わる者が金銭的な動機によってではないのは明らかである。

但し、ナイチンゲールは、教育ある女性達にこの愛の仕事をするのにためらわせるひとつの大きな理由は、一般に病院におけるいいようのない退屈を経験したあと、彼女たちの次のような独り言から察せられるとする。「もし私が道徳的または精神的な仕事をしなくても良いならば、もし私がただ掃除をしたり、汚れた髪の毛を梳いたり、胸の悪くなるような傷の包帯をしたりするだけでよいならば、私はそんな仕事をするによって天国へ行きたいと信じているわけではないのですから、そんな仕事は生活の糧を稼がなければならない人たちにまかせて、その人たちの仕事の縄張りを荒らさぬようにしましょう。」⁶⁸⁾これは、つまり、シスター達は、シスターであるがゆえに、看護の仕事が自身の役割りであるかどうか葛藤していることを示す。心と身体につながりから考えれば、患者の肉体的回復に向けたケアがいかにか精神性や道徳性を高める活動になることについては、ナイチンゲールが自立した後の活動モデルによる。

病気で苦しんでいる患者によって夜間は不安であることはもとより、看護師がふと口にした言葉が、苦しみを増したり、和らげたりすることがある。同施設での看護師の教育は、人しれず人々に影響する振舞いが身につくような、また時宣を得た言葉がふと口をついて出るような看護師になるよう教育し実力をつけることである⁶⁹⁾。フリードナー牧師は、たとえば患者が心中苦しんでいるとか、患者は自分だけ正しいと思っているとかの、病棟で起こりやすいような事例を看護師たちに示し、そうした場合、看護師はどうしたらよいかを尋ね、彼女たちの答に注意深く耳を傾け、その答えを訂正するのであった⁷⁰⁾。つまり、彼の教育(instruction)は形式的な講義では決してなく、質問する、答える、というかたちをとっていた。それは、この学園の女性達が熟慮と慎重さをもって、精神的な教化を行うことを実際にどのように訓練しているかを示すものである⁷¹⁾。フリード

ナー牧師の教育は全般的に行き届いていた。牧師自身が医療者ではないので病気に対する医学的知識は少ないと考えられるが、実際に起きている現象からどうすべきかを考えるような教育をしている。彼の教育は、看護師たちにどこにどのようにはたらきかけるか、これらの女性達が自分の患者たちのところに、特に子供たちのところに、教化を与える機会を捉えようといかにところを砕いているかのエピソードを紹介している。また緊急の場合、どのような処置をとるべきかについて説明し、問題が起きて判断に困ったらいつでも彼の助言を求めてくれることができるように手筈を整えていた。フリードナー牧師は看護師に対し、ほかに例を見ない平易さで教えることと、彼らに対し絶えず注意深く見守ることによって、種々の危険から看護師と患者を共に守っているのである。毎週彼は看護師たちに一場の講義を行うが、そのまゝに看護師は皆その週の朝と夕に彼女の患者に読んだ祈りの内容と、彼女の担当の病棟で起こった事柄、また仕事のすすめ方についての彼の忠告をどのように活かしたかについて報告することになっている。牧師の教育は、実に今日提唱されているアクティブラーニングである。

フリードナー牧師の教育のもうひとつの秘密は、彼の権限を名目だけでなく実際に部下に委任していることである。⁷²⁾牧師の熱意は、すべてシスター全体にいきわたっている⁷³⁾。それは牧師から良い感化を受けているからである。それは、一般の病院の看護師や医師のもっているねたみと対象的である。だから、普通の病院で学びたいと願っている女性が感ずる困難やいとわしさを知っている人たちには、カイゼルスウェルトを訪れることをすすめたい。シスターたちは自分のもっている知識を惜しげもなく与える親切さと、それが洗練されたやりかたで行われることであろうとナイチンゲールは述べた。

病棟における、夜間看護は良く管理されている。疾病に関する神の意図を私たちは悟り、それを遂行することが私たちの役目であるに違いない。御意図が行われますよという言葉は、私たちにとっては、小さな事柄がなされていることを願っているのであって、大きな事柄が成就されることを願っているのではない。神は患者ばかりでなく、看護師たちをも神に近づくよう導いておられる⁷⁴⁾のであろう。闇の中ではとナイチンゲールは述べ、神は光と炎の柱となって、イスラエル

人たちに現れ給うたのであったが、昼間では、たんに煙の柱としてしか示されなかったのを思いあわせるとよいと述べた。カイゼルスウェルトでは、看護師は夜間の看護を重荷というよりは恵と感ずるようになっている。看護師は、夜間3時間半以上は起きていない。そして、夜間看護は病院の全員が交代で行っているの、それぞれひとりのシスターには、多くて週一回、夜勤がまわってくるに過ぎない。シスターたちは10時に寝床につき、5時に起床する。どの病棟にもひとりのシスターが眠ることになっている。一方、一人の当直者は建物全体を見張っている。午前1時半には、彼女はもうひとりと交代する。1時間ごとに全病棟を見回り、男性患者の部屋を除く各部屋に静かに入って点検している⁷⁵⁾。

夜間看護では、以上のような体制で二重の利益が得られているのである。当直者は眠り込んでしまうことがなくなるし、また、危険な状態ではない患者のこまごました要求や訴えのために、病棟シスターを目覚めさせることなく応えることができる。重篤な疾病にある患者は外科の患者の場合には、病棟のシスターは、もちろん起きていなければならない。夜間看護者の控室は子どもの部屋の中にある。そこは幼児ならどんな年齢でも受け入れられているので、きめこまかな注意が必要である⁷⁶⁾。このあたりの観察内容は、後のナイチンゲールの教育方法に反映されている点である。それはギャンプ夫人に代表される粗悪な看護師とは一線を引くものである。

ディーコネスが、この仕事をしているうちに病気になる、体力が弱ったりしたひとたちに対しては、母の家が両手をひろげて待っている。“あなたが傷ついたことは、この仕事では名誉であれ、恥ではないのですよ”というのが、つらい手術を受けようとするディーコネスに与えた牧師の言葉である⁷⁷⁾。ディーコネスのキリスト者としての自由は注意深く守られている。ディーコネスが教会で厳粛なる聖別を受けたのちに、主の前において約束した5年間といえども、万一、結婚とか両親の事情とか、またなんらかの重要な義務が彼女の身に起こった場合には、彼女は自由であり、年限を満期に終わらなければならないという拘束はない。同学園はディーコネスたちにとって親のような役目を担っている。彼女たちが仕事をしている他の施設が彼女たちに、大きすぎる要求をしたとき彼女たちを守るためにも、また彼女たちが病を

得たり、老齢に達したりしたときにも憩いの家でありつづけるためにも必要欠くべからざるものである⁷⁸⁾。

5. 刑期を終えた女性のための更生所と教護院

1833年に学園が教護院(Asylum)を創立して以来、197人が受け入れられてきた。学園は牢獄と社会生活のつなぎを円滑に行わせる役目をする場所であり、彼女たちが社会に対するなんらかの奉仕ができるように力をつけると同時に、彼女たちの更生の願いを強め励ます場所であろうとしている。したがって、彼女たちは少なくとも更生しようとしているという内容の、監獄づきの牧師からの証明書を持ってこなければ学園にはこれられない。罪を犯した人の再犯率は高い。これらは個人の特性もあると考えられるが、多くは職業がなく、生きていくために必要不可欠な手段が講じられないためにある。彼女たちが、罪を重ねない為には、彼女たちの社会的安寧が必要である。その為には経済的自立が得られるための職業があること、その事が、彼女たちの精神性を向上させるための必要不可欠な要件となろう。

現在、教護院は定員15名であり、23歳ぐらいの12名の女性達が収容されている。彼女たちが働く建物には、台所、仕事部屋、アイロンかけの部屋、そしてたくさんの個室がある。彼女たちにとって長い間奪われていたり、その良さを知らなかったりした家庭的な交わりの生活を再び経験し、愛することを彼女たちに味あわせ、教えることにあるからである。彼女たちがここにいることは全く自由意志によるものであって、もし、この学園の規則に服従したくないならば受け入れることもないし、とどまることもない。彼女たちは牧草地や原野や広い庭園を自分たちの働きのもとでもっており、看護の家の庭園で幸運にも育ったシスターたちの指導のもとに、それらを全く自分たちで耕す。清浄な大気と激しい労働と野外仕事への興味とは、針仕事などよりもはるかに彼女たちにとって有益なのである。それは彼女たちが考えることにおいても、健康を改善することにおいても、彼女たちが田舎の生活ができるようになる点においても有益なのである。この学園は特に郊外をいつもその場として選ぶのである。彼女たち以外はその領域に入っていないし、開拓時代のアメリカの方式にのっとり、夜はひとりひとり別個の個室を持っている⁷⁹⁾。個室でひとりになることは、彼

彼女たちの人格の陶冶のために大変良い影響を与えてきた。その個室はみな庭に面しており、寝台と椅子があるだけであるが、これを教護院にいる人々が、自らへりくだっていることを表したいからなのである。

教護院の生活環境そのものが勤労の精神を養うと共に癒しの空間になっている。彼女たちは牛舎の中で牛を飼い、また家畜を育てているが、皆共通して動物が好きであり、よく面倒をみるので、動物の世話をするのは彼女たちの人格の育成に良い働きをするに違いない⁸⁰⁾。精神を病んだ人の治療には、自然環境からの癒し、人的環境からの癒しが期待される。適度な労働に従事することは今なお提案される療法である。適度に身体を動かすことは、心地よい疲労感につながり、心地よい睡眠導入につながる。睡眠の充足は、心身の回復に重要な要素であろう。物質的な理由で、彼女たちの食事は貧しく、1週にたった2回しか肉類を食べられない。しかし、そのことが不満であってもそれは彼女たちだけに起こることではない。彼女たちは2人のシスターも同じものを食べ、いつも感謝に満ちているのを知っている。そして、彼女たちの日常生活は規律あるように整えられ、朝5時に起き、もし晴れていれば朝食までの時間までに庭園でひと働きし、一同集まって祈りをし、歌う。シスターは聖書の一章を説明し、祈る。少女たちのひとりが食前食後の祈りをする。シスターはいつも彼女たちとともにおり、冬にそなえて野菜の準備をする。縫い物や糸を紡ぐなど座ってする仕事をするときには、彼女たちのそばで物語を語って聞かせることもあり、讃美歌を歌うことや自分たちで何か話をするよう彼女たちに頼むこともある⁸¹⁾。その後、彼女たちは教区の牧師から一週に1度講義を受けたり、歌のレッスンを受けたり、読み書きのできない者は師範学校から無償できてくれる教師に教わったりしている⁸²⁾。

入所後、8ヶ月ないし15ヶ月の期間中、彼女たちが品行方正であったら、その品行を保つような住まいが整えられる。住まいは一般的に郊外に求められ、市中にはほとんど用意しないし、居酒屋などは決して選ばないよう配慮される。また、学園は彼女たちの生活の場を、前に住んでいた所からできるだけ離れたところに用意する。それは、彼女たちが少しでも知られていない場所が望ましいからである⁸³⁾。その他、いくつかの気遣いを述べると、家庭の祈りに一員をして受け入れられる

こと、神の奉仕の仕事に参加すること、その地区の牧師は彼女たちの参加を把握していること、また、彼女たちはフリードナー牧師への通知なしには決して退会されることがないこと、などである。彼女たちと教護院との間には常に文通がとり交わされている。彼女たちはいつでも学園を訪問できるし、彼女たちは互いに訪問し合っている。また、彼女たちはフリードナー牧師が司会をする祝賀会に招かれる。彼女たちの身持ちがよくて、自分自身の状態を向上させられればカイゼルスウェルトにしばらく宿泊することが許される⁸⁴⁾。

ナイチンゲールは後に、女性達を救う手段として「今の時点では最も重要な事はこうした大勢の人々に対して、その悲惨さを軽減する事と、この恐ろしい罪を犯す機会と誘惑とを抑制することに焦点を当てるべきであって、この後者を成し遂げるのに教団の中でするのが、最も良いなどと考えて少数の人間を精神的に高める事に焦点を当てたりすることではないのである。」⁸⁵⁾と述べ、まず、正当な雇用を促進し、相応な生活費と蓄えとを保障する事、そして数の多少を問わず、ともかく貧しいけれども節操のある女性達をできる限り保護し、自制させ、高めさせ、そして清める事が明白な目標であり、実りをもたらすことであると述べた。

6. 「教区」ディーコネス (Parish Deaconesses)

先述したように病院は、ディーコネスの為の訓練の場である。学園にいるシスターが、その教区のディーコネスである。そして大勢のシスターが教区のディーコネスとして、牧師または訪問教会の求めに応じて遠くの教区へ派遣されている。彼女たちは、適切な対応ができる訪問能力が不足していることを知っている。その事が彼女たちの精いっぱいの気持ちをどんなに衰えさせ、落胆させてしまうか身にしみて知っている。そして、派遣されたディーコネス達は次のようなことを自問自答している。「私は乱雑で不潔な状態や愚かしい習慣や整理が行き届いていない有様を目撃する。しかし私はそれにどう手助けできるかわからない。私自身どのようにすればもっとよい状態にできるか教えられないでいるのに、私は疾病を見る。しかしどう取り計らってよいかかわからない。それにもかかわらず、私がしたいと思っていることは、それこそ、身体への働きかけを通して患者

のころへの道を見つける。まさにそのことは、彼らが住んでいる小屋でできることなのである。椅子に座って種々の質問をすることは、貧しい人々であっても誰とであっても、ころところのほんとうのふれあいができるやり方ではない。しかし、私が彼らを看護するすべを知っていれば、さらに多くのことができる機会が自然と出てくるし、あるはっきりした使命を自分に引き受けることにもなるであろう。わたしたちが訪問することを学ばねばならないことと、「私たちが人々に教えられるよう実力をもつことが事実として残されている問題である。」⁸⁶⁾ 病院看護では対象特性、病気について、看護方法に対する理解は必要不可欠であり、教育でも同様にいかに指導するかという事が求められる。

さて、問題はディーコネス達に不足した能力を補っていくために、どのように教育していったらよいかということである。カイゼルスウェルトの教区ディーコネスは、病院、学校、教護院、家政部門などの体験から学んでいる。貧しい人達に不足していること、自分たち自身に不足していること、そして貧しいひとへの対処の仕方などである⁸⁷⁾。彼女は朝のうちから巡回を始め、肉親がよく面倒をみることのできない病人のためにこまごまとした仕事を行う。彼女は子供たちにちょっとした手仕事や編物やへり地製の靴づくりなどを教えることもある。しかもひとをひきつける誠意のやり方でこれらすべてのことを行うので、両親たちが彼女を信頼しはじめ、ついには掃除や料理や家を整頓するすべを教えてくださいと頼みに来るのである。カイゼルスウェルトの教区ディーコネスは小さな念入りなノートをいつも持っていて、彼らにかくかくしかじかの家事について教えてもらいたいと頼まれたことを書きこむのである。そうして彼女が行くところはどこでも徐々にきちんと片づけられていくのである⁸⁸⁾。

新教徒は、旧教徒が行うような方法で死に身をさらすことは決してみられないとしばしばいわれてきた。しかしこの言い伝えは、カイゼルスウェルト学園から派遣された勇敢な女性達の行動によってくつがえされたのである。彼女たちはコレラ、チフス、また他の感染症が猛威をふるっているところならどこへでも行って働き、大勢の人々の命を救った後、その場所で生を閉じた⁸⁹⁾。21人のシスターが市中での看護活動に従事していたのだが、コレラの流行によって大変な活動を強い

れ、多数が感染してしまった。そして、彼女たちはよく闘い、自分の生の道程を全うし、永遠の家へと帰っていった⁹⁰⁾とナイチンゲールは、ディーコネスたちの死をも恐れない勇敢な行動として絶賛している。これらの事例も、称賛に値する行為かどうかは判断すべきもないが、感染症に対する知識のなさや当時の医学及び公衆衛生の悪さを証明するものであり、これが後のナイチンゲールの地域福祉活動へと繋げる要因であると考えられる。

7. 師範学校、孤児院そして幼児学校

女性達に対してシステムの教育がないと考えたナイチンゲールは、女教師たちが人を教えられるように訓練されることが重要であると考えていた。この当時の女子教育は良妻賢母主義思想が反映され、行儀作法や家政中心主義であった。この教育に関わったのがガヴァネス (Governess) と呼ばれる家庭教師である。しかし、家庭教師になれるほどの教育を受けられるのも限られた人達であった。これがナイチンゲールの現実認識であると考えられる。

ドイツのワイマールには1726年頃から教員養成学校が設立され、18世紀末には30校位の教員養成学校が存在していた。1802年頃から義務教育制度が始まり、1806年のナポレオン戦争後から国民教育が開始された。当時の初代文部大臣からジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー⁹¹⁾に宛てた手紙には「プロイセン政府があなたの元に派遣した者があなたの全教育方法、教授方法の精神をもっと純粋に汲み取る事を期待します。」⁹²⁾と書かれており、ドイツ政府がペスタロッチーの教育方法とその精神を採用した事が認められる。ペスタロッチーの著作『隠者の夕暮れ』⁹³⁾は、キリスト教の“神の下の平等”思想とその実践的教育方法の提示である。彼はその教育実践から“民衆教育の父”と呼ばれた。彼の民衆教育は、孤児救済の形で始まり、子どもたちと寝食を共にするという教育方法である。それは貧民の子どもたちにいかに道徳を教えるかであった。その教育に当たる教師には、聖職者的要素が求められ“教育愛”的関わりが求められた。そして、ペスタロッチーの思想を受け継いだフレデリック・フレーベル⁹⁴⁾は幼児教育を開始した。幼児学校は英国の幼児学校とあまり変わらないので、ことさら特別に説明を要しないであろうとナイチンゲールは述べている。と言うのは、イギリスでは、フレーベル思想の普

及に強い熱意を示したフォン・マーレンフォルツ・ビュウロー⁹⁵⁾が、1851年から、幼児教育を積極的に展開していたのをナイチンゲールが知っていたからであろう。ちなみに、ペスタロッチーの思想による教員養成がイギリスに開始されたのは1840年のことであり、それは、救貧法行政官であったケイ・シャトルワース⁹⁶⁾によってもたらされた。彼は8名の貧困孤児を迎え入れてその教育を開始した。

ナイチンゲールが実際、体験したドイツのカイゼルスウェルト学園でも、看護師と女教師の教育が同時に行われていた。フリードナー牧師自らが、志願学生（幼児学校、昼間学校、工業学校の女教師になろうとしている）に与えた訓練については大いに言及する必要があるとナイチンゲールは述べる。たとえば彼は、聖書からひとつづきの物語となっていくようなある物語を選び、志願学生全員が集まった教室でそれについて講義を行う。そのつぎの日に学校で教える番にあたっている志願生は夕方彼の前でその物語を話す。翌朝、彼は教室に出向き彼女が子供たちに話すのを聴く。つぎの講義の時、彼は彼女の物語の仕振りとかその中での失敗とか子どもたちをもっと興味をもつような仕方とかについて自分の気づいたことを述べるのである。幼児学校や昼間学校の志願生には、年長の子供が面白い店や、年少の子供の注意をひく要領を講義の中で説明する。子供たちには、なまの声で教え込むことの重要性がとりわけ説明される。教師のランケ氏もまた教授法に関して見事な実際的な講義⁹⁷⁾を行っている。

孤児院では、どの家庭も孤児達は、ディーコネスと一緒に住み、まさに彼女の子供として生活した。まさしくペスタロッチーが範を示した教育方法の展開である。新しく子どもが受け入れられるときには、到着を祝うちょっとした会がもうけられる。その会は、教師自ら司会をするが、彼は子供たちをよく理解しているので、その幼い新来者が圧迫感をもつどころか気楽にくつろげるようにもてなす。その子供はどの歌を歌ってほしいかを選び、牧師からささやかな贈物をもらう。そしてお茶の後の夕べの会の終わりに自分のための祈りをしてもらうのである⁹⁸⁾。しかし私たちはこの女教師が、子供たちのあきることのない遊び仲間であり、ゲームの相手である事を喜んでつけ加えておく必要がある。どの学校の志願生であっても1日1時間はここで過ごすことになっており、2

週間に1度は1日じゅう一年組を受け持ち、1週間に1日は二年組を担当することになっている。

この学園のディーコネスは116人である。そのうち94人が聖別⁹⁹⁾を受けており、22人は見習い中である。67人はドイツや英国やアメリカやエルサレムにおいて、病院や教区や救貧院で働いている。残りの人達がカイゼルスウェルトで働いている。ドイツの津々浦々から、また、コンスタンチノーブルから、さらに東インドからもディーコネスを送ってほしいとの要望が絶えず寄せられているが、まったくそれに応じられない状態である。働き手というものは求められれば求められるほど集まるものである。ナイチンゲールは、これがディーコネスの将来であるならばオールド・ミスとなるおそれは消しとんでしまうであろう¹⁰⁰⁾と述べ、「英国の女性がこういう動機で働くことができること、そして優れた働き手であることは、ローマ・カトリック・シスターの慈善団体の働きによって証明済みである。」¹⁰¹⁾と述べた。

そして、著作の最後にナイチンゲールは、「ときは熟している。待ち望んでいる病人や貧しいひとはどこにいたのであろうか。さあ、怠ける事に忙しい英国の女性達をドイツで行われていることに目を向けさせよう。そこには生き生きとした仲間達が主キリストを中心として働いているではないか。」¹⁰²⁾と女性達に呼びかけた。そして、主に私は親愛なる英国の使女たちをよんだのだが、彼女たちは答えなかった。私は彼女たちの扉の前に立ち、ノックしたが彼女たちは開けようとしなかったといわれることがないようにしようではないかとも呼びかけた。1846年にナイチンゲールが父親に宛てた手紙の内容、「なぜ、女性は男性のように抽象的概念を理解する事ができないのか。なぜ女性達は男性と比較して創造性に欠け、知性に欠け、自己決定ができず、宗教的感化も少ないのか？」¹⁰³⁾という言葉でも分かるように、この当時の女性達は労働者階級では無学な者が多かったし、上流階級の女性達は知識と行動に偏りがあった。ナイチンゲールは、知識は有しても実践の伴わない女性達は、斜めにたっている状態であると辛辣に批判した。彼女の考えでは、知識というのは単に有している事が必要なのではなく、実践するために必要であった。

Ⅲ. ナイチンゲールの看護・福祉思想の原点としてのドイツの社会事業

福祉という言葉の原点に戻った時、その言葉が人々の幸福であるという事、その幸福な人生を送る為には健康であることが何よりであることの共通認識はできる。さすれば、ナイチンゲールの活動のほとんどが人々の健康に関わる取り組みである事から、その思想は福祉思想であるとも言える。フリードナー牧師によって設立されたカイゼルスウェルト学園は神の使い手としてのディーコネスのための訓練学校、幼児学校、幼児学校の女教師のためのセミナリイ（師範学校）、孤児院、救護院などが存在する複合施設であった。同学園は主としてディーコネスのための訓練学校としての機能が強い。それは行場のないオールド・ミスと呼ばれる女性達を可能な限り訓練して病院看護や女教師、地域福祉に貢献できるようにすることである。その活動は福祉国家と呼ばれるドイツ国民のみならず、多くの地域への貢献活動であった。

フリードリッヒ・エンゲルス¹⁰⁴⁾によればドイツは、福祉助成の理念によって、啓蒙絶対君主（領主）により統治され高権的に施されるところの警察国家における福祉国家的側面が強くなった。警察国家とは、国民の行動や表現・思想など人権や自由を制限する強権政治によって、国民経済や国民国家の確立を図ろうとする国家のあり方をさしている¹⁰⁵⁾。カントによれば国家とは、法の諸法則のもとにおける人間の一群の結合である。各国家は、それ自身の中に三種の権力を有している。立法者という人格における支配権、施政者という人格における執行権、裁判権（司法権）の三つの権力によって国家が自立性を保つことであり、その統一の中に国家の福祉は成り立つと考えた。この絶対主義における福祉国家的側面について国家に依存するのではなく公共性に依存した福祉をカントは提唱した。つまり、幸福を私の目的としてそれを追求することが義務であるならば、それは他の人々の幸福にならなければならないということである。

中世にあって社会福祉は、貧民すなわち生活困窮者に対するケア、孤児すなわち捨て子に対するケア、施設運営を担う教会制度によって支えられていた。つまり、政策の主な対象は貧民と孤児である。まず貧民政策は、司教が貧民に財貨を配る義務があるとみなされていたことによる。そのため司教は、巡礼・病人・孤児への給養施設を維持

していた。ドイツで慈善事業を主たる目的としたカトリックの女子修道会が19世紀初頭に登場し、救貧・看護・児童保護・女子教育など様々な目的の為の修道会を各地に設立した。そこで教育を受けた修道女は病院や診療所の看護師、施設の職員や幼稚園教諭、教区のシスターとして各地に配属された。ナイチンゲールが歴史検証したように十字軍の出兵にあわせて行われた看護奉仕団が、そのままキリスト教伝導の目的とも相まって、慈善修道女会による看護の奉仕活動は、4世紀も遡ると言われている。イギリスでは1531年に救貧が始まり、1601年のエリザベス救貧法（Poor Laws）に始まり、幾度も改正が繰り返された。ドイツでは、1842年にプロイセン救貧法が成立し、1871年にはライヒ救貧籍法、1880年にはドイツ救貧・慈善教会が設立された。慈善教会はイギリスの慈善組織協会（Charity Organization Society 略してCOS）を模倣した組織で、救貧のみならず、民間慈善の改革をも視野に入れた専門家組織である。

ナイチンゲールの思想的背景を宗教的・社会的・政治的背景から考えた時、当時のイギリス社会ではプラトン主義が新たな復活を促し、人間性の働きの基づく経験論的認識論が出現した。その後、真理と善なるものとは究極的に一致するとの立場を探究するケンブリッジ・プラトニストたちは、プラトン主義とキリスト教とを結びつけ、宗教的対立を解決する手段にしようとした。そして、ロックの哲学は経験論的認識論の立場による合理主義的思考が、哲学の分野から自然科学の分野に広がるにつれて、伝統や宗教的制約から脱却して個人の合理的・主知主義的判断に基づく自由の要求が高まった。イギリス社会の思想的影響を直接的に受けたナイチンゲールは、成長・発達段階において、信仰こそが魂の真の目であり、耳であると感じた。神の存在と日常生活の様々な現象とが、神との一体感の中で生まれるものであると感じた時、真実の目は真理の探究につながるというのが、ナイチンゲールの導き出した結論であった。それはまた、当時の宗教に対する社会の認識を否定し、キリスト教を受けいれながらも、彼女独特の宗教観が人生観を形成する契機にもなっていると考える。その生活は、キリストの教えを実践する神の僕としての生き方であり、それが自身の望んだ理想的生活であった。その理想的生活のヒントが学園にはあった。そして、自身も、優れた理想と高邁な感情に対して共感する気品ある

計画を持った生活を実践することにあつた。それは伝統的な規制の中で、女性が与えられた役割をそのまま柔順に受け入れ、男性の力に頼って生きていくのではなく、自分の一生は自分で責任を持つという事であつた。そこに彼女の言う人格の問題があつた。人間の尊厳とはまさに、他人の目的のための手段でなく、自分自身の目的に自分自身をおかねばならない。それは、ナイチンゲールの有する人権思想に基づいた人道主義的思想を背景に、実際に起きている現象を科学的な根拠を持って観察し、認識するというイギリス経験認識論が統合され、彼女自身の科学的な姿勢となり、看護・福祉思想の原点になっていると考える。ナイチンゲールのカイゼルスウェルト学園での経験は、自身の内部にある女性の生き方に関するもやもや感を払拭し、自然法 (natural law) の中で、女性にも生来与えられている自然権があるという確信を得たという事であろう。つまり、女性の幸福追求権は、女性の福祉に関する事であり誰にも与えられた平等の権利であるという事である。“19世紀は女性の世紀”に始まる『カイゼルスウェルト学園によせて』は、ナイチンゲールの女性の権利・擁護のための宣戦布告とも思える著作であつたと考える。

■ おわりに

本稿ではナイチンゲールの生涯において、自身の主張と対立する家族との闘いのさなかに実行したドイツの『カイゼルスウェルト学園』での経験を参考に、行為の源としてのナイチンゲールの看護・福祉思想を検証・検討した。カイゼルスウェルト学園は、病院、更生所と教護院、師範学校、孤児院・幼児学校を付設していたが、その機能はほとんど、女性の聖務としての教区ディーコネスの訓練である。その訓練は女性たちを看護師や教育者として教えられるようにすることであり、訓練されたディーコネスは同学園の“母の家”を拠点として求められる場所へ出向し、社会貢献する事であつた。それは女性の福祉のみならず、教育された女性たちによる地域福祉貢献活動である。

“生きる”この問題のために多くの女性達が、将来への不安から精神を病んでいるとナイチンゲールは考えた。彼女は、女性達にシステム的な教育を与え、教育を受けた看護師達が病院で患者

の回復に向けた支援と健康教育を成す。その事によって、患者の健康が回復し、再度、社会において生き生きとした活動的な生活をする事が可能になる。それぞれの活動が地域住民の健康問題解決への取り組みである。加えて人々が生活する地域の公衆衛生は究めて重要であり、その教育・普及に女性達が参加することによって国民全体の健康の保持・増進に繋がる。明確な目的は実現していかなければならないと考えたナイチンゲールは、病院看護をより良くしていくことこそが、人々の健康問題解決の唯一の方法であると考えた。健康であることが幸福であるとしたら、それは地域福祉に関わる活動である。加えて労働によって自らの生活の糧を得ようとする女性達を可能な限り訓練し、組織化していくことは女性の福祉に関する問題である。女性達の雇用の促進によって女性達の社会的・経済的自立にもつながれば、その精神性が高まる。その精神性が高まれば将来への不安から“生ける屍 (dead body)”状態から脱却でき、人間性を取り戻すことができ、一人の人間として人格を持ちえるのであつた。

人は誰でも家族から自立し、社会的適応の過程を踏む。そして、その過程における職業選択の自由と自己の幸福追求権は人間の基本的人権であり、男女を問うものではない。ナイチンゲールは、キリスト教教義の“唯心論” (spiritualism) 的考え方の中にあつて、人間の基本的要求である衣食住の保障が女性達の精神を安定させ、その精神を教化することができると考えた。カイゼルスウェルト学園では、ディーコネス訓練の機能を持つ、“母の家”方式によって女性達を地域社会に貢献させた。しかし、看護に関する限り、その方法については、カイゼルスウェルト学園における“母の家”方式というよりは、彼女のオリジナルの教育方式を採用しており、それはナイチンゲール方式と呼ばれるものである。実際、ナイチンゲールの看護・福祉思想における教育は、職業的に自立させ、経済的に安定させることであつた為に女性の聖務、つまり、天職 (Calling) というより、専門職業人 (professional) 育成であつたと考えられる。それにはナイチンゲールが、キリスト教の精神の単に“唯心論”者であつただけでなく、“唯物論”者 (materialism) でもあつたことも関係していると考えられる。

注

- 1) Florence Nightingale (1851) : The Institution of Kaiserswerth on the Rhine for the Practical Training of Deaconesses, under the Direction of the Rev, (湯槇ます他訳：ナイチンゲール著作集第一巻, カイゼルスウェルト学園によせて, 現代社, 1983年.)
- 2) ジョン・スチュワート・ミル (John Stuart Mill 1806-1873) イギリスの哲学者, 経済学者. ジェームズ・ミル (James Mill 1773-1836 イギリスの哲学者, 歴史家, 経済学者ベンサムの弟子), の息子. ベンサム (注34) 参照) の助言に基づき父ジェームズによって早期教育を受ける. 『経済学原論』や『自由論』を書いて, 私有財産制や経済的自由を擁護しつつもその限界を認め, また自由を経済的自由からよりも精神的自由から根拠付けて, 自由主義に新しい展開を与えた.
- 3) 佐々木秀美著：ナイチンゲールと看護教育—その教育目的へのアプローチ, 看護教育, Vol.36, No.1, 1995年.
- 4) 佐々木秀美著：ナイチンゲールとミルとの論争, 総合看護, Vol.37, No.3, 2002年.
- 5) 佐々木秀美著：モール夫人への手紙に見るナイチンゲールの女性観, 看護学統合研究 Vol.11, No.1, pp8-28, 2010年.
- 6) 佐々木秀美著：ナイチンゲール—女性の専門職を創設する—19世紀は女性の世紀, 看護学統合研究 Vol.13, No.2, pp16-41, 2011年.
- 7) 佐々木秀美著：ナイチンゲール—精神的危機から自立へのプロセス—真実の目は真理の探究につながる, 看護学統合研究, Vol.12, No.2, pp28-47, 2011年.
- 8) 佐々木秀美著：ナイチンゲール教育思想の源流—日常生活は心に問いを抱かせ, 知性はその問いに答えを要求する, フローレンス・ナイチンゲール, 看護学統合研究 Vol.12, No.1, pp42-67, 2010年.
- 9) 佐々木秀美著：ナイチンゲールの組織管理論—他者をコントロールするにはまず己をコントロールせよ, 看護学統合研究 Vol.16, No.2, pp1-21, 2015年.
- 10) テオドール・フリードナー (Pastor Theodor Fliedner 1800-1864) : プロテスタントの牧師. ドイツのカイゼルスウェルトに赴任した際に, 人々が経済的に苦境に陥っていたため, 救済資金を求めてイギリスに足を伸ばした. そこでエリザベス・フライ女史の女囚保護事業活動を知ってドイツに広めようとした. その一環として1836年に看護師の養成所も含めたカイゼルスウェルト学園を創立した.
- 11) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860) : Cassandra/Suggestions for Thought, p95, Pickering & Chatto Limited, 1991.
- 12) エリザベス・フライ女史 (Elizabeth Gurney Fry 1780-1845) : 有名な社会改革者. クェーカー教徒. ビクトリア朝の期間中に刑務所を改良した先駆的な運動家.
- 13) クリстіアン・ヴォルフ (Christian Wolff 1679-1754) : ドイツの哲学教師. ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz 1646-1716 ドイツの哲学者・数学者) からカント (注14参照) への橋渡的存在. 最初に神学を学び, イエーナ大学・ライプツィヒ大学で哲学と数学を修め, 1704年からライプニッツと交わり, その推薦で1707年にハレ大学の数学・自然学教授. 1709に哲学教授となる.
- 14) イマヌエル・カント (Immanuel Kant 1724-1804) : ドイツの哲学者. ケーニヒスベルクに生まれる. 同地の大学に進み神学・哲学を学ぶ. 後, 1746年 (延享3年) にケーニヒスベルク大学の私講師になり, 1755年に同大学の論理学・形而上学の正教授となる.
- 15) 佐々木秀美著：ナイチンゲールの国家登録制度問題論争にみる看護の本質論—看護はキリスト教的愛の実践, 看護学統合研究 Vol.17, No.1, pp10-26, 2015年.
- 16) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p471.
- 17) 山岸仁美, 阿部恵子, 寺島久美, 三宅玉恵：ナイチンゲールにおける看護学教育の源流—カイゼルスウェルト学園によせてより—, JOURNAL OF FLORENCE NIGHTINGALE STUDIES, Number 9, March 200.
- 18) 佐々木秀美著：前掲書7).

- 19) Florence Nightingale (1860) : Note on Nursing, p165, Scutari Press, 1992.
- 20) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860) : 前掲書11), p95.
- 21) ミセス・ブレースブリッジ (Serina Bracebridge 1800-1874) : ナイチンゲール家の人々はその名をシグマという愛称で呼んだ。ミセス・ブレースブリッジはナイチンゲールを自分の人生の中心に捉え、情愛を注いだ。ナイチンゲールの精神的危機のとき、彼女は命綱であり、クリミアの時も一緒に行動した。
- 22) シドニー・ハーバート (Sidney Herbert 1810-1861) : クリミア戦争当時の戦争大臣。ナイチンゲールの生涯のパートナーであり、良き理解者、協力者である。名門ペンブルック伯爵家に生まれ、政治家となった人物。1852-1855, 1859-1860に陸軍大臣を務め、ナイチンゲールの改革を推進した。しかし、激務のため病気となり、公務からの引退を希望するが、ナイチンゲールはそれを許さなかったといわれている。辞職後に病死。
- 23) ヨジラス・ブンゼン男爵 (Josias von Bunsen 1791-1860) : プロシアの大使。ヨーロッパ中にその名を知られた聖書学者であり、エジプト学者としても知られている。英国の良家の娘と結婚し、巨万の富を有し、女王やアルバート殿下とも親しい熱心な福音主義者。ナイチンゲールは彼の家に良く出入りし、書物を借り、考古学や宗教を語り合ったとされる。セシル・ウーダムースミス『フロレンス・ナイチンゲールの生涯』より。
- 24) アルバート殿下 (Prince, Albert 1819-1861) : ヴィクトリア女王の夫君。ドイツ・ザクセン・コーブルグ・ゴータ公爵の次男。彼の政治的助言は先見の明があったが、ドイツとのつながりがあり、政府や国民の不信があったために強い影響力は及ぼせなかった。1851年は大英博覧会を計画・運営した。ケンジントン公園に記念碑がある。
- 25) Cecil Woodham-Smith (1950) : Florence Nightingale, (武山満智子他訳：フロレンスーナイチンゲールの生涯 [上巻], p89, 現代社, 1987年。
- 26) メアリー・クラーク (Mary Clarke Mohl 1793-1883) : 子ども時代から成人するまで各地を転々とするが、レカミエ夫人 (Juliette Récamier 1777-1849 19世紀フランスの文学・政治サロンの花形女性) の支援により、パリに“クラーキー”という最も優秀で知的なサロンを持った。特にヘンリー・ボナハム・カーター ((Henry Bonham Carter, 1827-1921 ナイチンゲールの母方の従兄弟) や文学者たちと親密な交友関係を持った。
- 27) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p18.
- 28) Florence Nightingale (1860) : 前掲書19).
- 29) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p4.
- 30) オランブ・ドウ・ゲージュ (Olympe de Gouges 1748-1793) : 本名はマリー・グーズ。ルイ16世 (Louis XVI, 1754-1793 フランス革命により刑死) を擁護したり、ロベス・ピエール (Maximilien François Marie Isidore de Robespierre 1758-1794 フランス革命期の政治家) などのジャコバン系を批判したりした。フランスの人権宣言が全ての人間の普遍的な人権を確立したがごときに見えていたが、実は人は男性であり、女性の権利は排除されていると最初に批判して女性及び女性市民の権利宣言を書いた。
- 31) オリビエ・ブラン著、辻村みよ子訳：女の人権宣言, p269, 岩波書店, 1995年。
- 32) メアリ・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft 1759-1797) : フェミニスト。結婚後は Godwin。職業を持つことにより、女性も依存の生活から脱却し、男性と平等の立場にたつと主張した。
- 33) メアリ・ウルストンクラフト著、白井堯子他訳：女性の権利の擁護, p23, 未来社, 1993年。
- 34) ジョン・ロック (John Lock 1632-1704) : イギリス経験論の代表的哲学者。近代民主主義の代表的思想家の一人。オックスフォードにて医学と哲学を学ぶ。ピューリタン革命、王政復古、名誉革命と激動していく時代に生活し、人民主権に基づく代議的民主政治の理論を基礎づけることによって、名誉革命の指導的理論家になった。医師でもあり、ホイッグ党初代党首、シャフツベリー伯爵 (Anthony Ashley-Cooper, 1st Earl of Shaftesbury 1621-1683イギリスの政治家。) と親交を結び、

- 政治的にもその生涯を共にした。著作『教育に関する考察』は有名。
- 35) ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham 1748-1832) : イギリスの哲学者, 法学者, 社会改革家である。最も有名な功利主義者である。彼はあらゆる行為と立法の適切な目的は“最大多数の最大幸福である”と説いた。1792年にフランス共和国名誉市民になり多数の著書を発刊して経済・政治を説いた。
 - 36) フランソワ・ド・サンニャック・ド・ラ・モード・フェヌロン ((Francois de Saligmac de La Mathe Fenelan 1651-1715) : フランスの聖職者作家。彼は新カトリックの長としてプロテスタントの子女をカトリックに改宗する事, また既に改宗した子女達を再教育する事を任務としていた。
 - 37) ハリエット・テラー (Harriet Taylor 1807-1858) : 夫のテラー氏死亡後, ミル(注2)参照)の妻になる。ミルが1869年に執筆した『女性の従属』は彼女の協力によるといわれている。日本では『女性の解放』として翻訳出版されている。
 - 38) Florence Nightingale (1860) : 前掲書19), p165.
 - 39) EVELYN L. PUGH : FLORENCE NIGHTINGALE AND J. S. MILL DEBATE WOMEN, S RIGHTS, p121, Journal of British Studies, 1988.
 - 40) エドウィン・チャドウィック (Sir Edwin Chadwick 1800-1890) : 1867年, 当時師範学校長。英国の衛生改良家。貧民法委員会の書記を長い間努めた。ナイチンゲールの友人でもある。
 - 41) Florence Nightingale (1858) : Subsidiary Notes as to the Introduction of Female Nursing into Military Hospitals, (湯植ます他訳: ナイチンゲール著作集第一巻, 女性による陸軍病院の看護, p70, 現代社, 1985年.
 - 42) ハリエット・マーティノウ (Harriet Martineau 1802-1876) : 英国の女流小説家, 経済学者。デイリー・ニュースの主筆をしていた。彼女は情報や知識を小説の形で出すことを思いつき, 数多くの物語を書いて政治や経済や救貧院の話などを解りやすく解説して好評を得た。『フローレンス・ナイチンゲールの生涯』セシル・ウーダム・スミス著より。
 - 43) Harriet Martineau, British History and Military Reform vol.6, England and her Soldiers, p297, Edited by Deborah Anna Logan Pickerring & Chatto, 2005.
 - 44) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p5.
 - 45) ロバート・オーウェン (Robert Owen 1771-1858) : イギリスの近代社会主義の創始者。学歴は小学校程度であるが, 彼の経営するスコットランド, ニュー・ラナーク紡績工場における「性格形成学院」の実践は, 直観教授などの進歩的方式を採用し, 世界最初の幼稚園と言われた。
 - 46) 五島茂他編 : 世界の名著42 オーウェン, 『結婚・宗教・私有財産』, p294, 中央公論社, 1996年.
 - 47) 滝内大三著 : イングランド女子教育研究, pp57, 法律文化社, 1994年.
 - 48) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860) : 前掲書11), p139.
 - 49) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860) : 前掲書11), p216.
 - 50) Mary Poovey Edited, Florence Nightingale (1860) : 前掲書11), p222.
 - 51) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p7.
 - 52) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p7.
 - 53) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited : Ever Yours, Florence Nightingale Selected Letters, p56, VIRACO PRESS, 1989.
 - 54) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), pp10.
 - 55) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p12.
 - 56) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), pp12-13.
 - 57) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p13.
 - 58) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p13.
 - 59) Florence Nightingale (1851) : 前掲書1), p7.
 - 60) マルティン・ルーテル (Martin Luther 1483-1546) : ドイツ生まれ, ドイツ宗教改革の頂点に位置する人物。1501年にエルフルト大学に入学, 1502年に学士号, 1505年に修士号を取得した。1510年

- にローマに派遣され、その地の腐敗に衝撃を受ける。教皇庁の発行する免罪符やドミニコ会修士ヨハン・テツルの破廉恥な行為に怒り、行為ではなく信仰による救済の教義を説いた。
- 61) 聖ヴァンサン・ド・ポール (St. Vincent de Paul 1580-1660) : 司祭で博愛主義者。1600年に司祭になるが、1605年に海賊に捕らえられ、奴隷としてうられる。キリスト教信仰に戻りたいと主人を説得し、1607年にフランスに逃れ、1625年にラザリスト会という伝道司祭組合を作り、1634年に慈善女子修道女会を作った。1737年に聖人の一人に加えられた。
- 62) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p9.
- 63) ヘンリー 8世 (Henry VIII 1491-1547) : 即位後すぐに兄アーサーの未亡人と結婚するが離婚を決意し、内密でアン・ブーリンと結婚した。1534年に前妻との結婚を無効にし、王はイギリス国教会の唯一の首長であるとして修道院弾圧政策を始めた。
- 64) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p20.
- 65) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p14.
- 66) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p14.
- 67) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p15.
- 68) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p18.
- 69) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p15.
- 70) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p16.
- 71) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), pp17-18.
- 72) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p15.
- 73) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), pp18-19.
- 74) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p21.
- 75) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p22.
- 76) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p22.
- 77) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p23.
- 78) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p24.
- 79) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p25.
- 80) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p26.
- 81) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p28.
- 82) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p28.
- 83) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), pp26-27.
- 84) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p27.
- 85) Florence Nightingale (1860) : 前掲書 19).
- 86) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p31.
- 87) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p30.
- 88) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), pp30-31.
- 89) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p31.
- 90) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p32.
- 91) ジョハン・ヘンリック・ペスタロッチー (Johann Heinrich Pestalozzi 1746-1827) : 哲学者としてまた、教育思想家でもあり、貧民教育の実践者としても有名である。
- 92) 仲新編集 : 学校の歴史第5巻, 教員養成の歴史, p307, 第一法規出版, 1879年.
- 93) ペスタロッチー著, 長田新訳 : 隠者の夕暮れ, 岩波文庫, 1987年.
- 94) フレデリック・フレーベル (Friedrich Frobel 1782-1852) : ドイツの教育家。幼稚園の創始者。イエーナ大学時代ドイツ, ロマン派の影響を強く受けると同時に、1805年ペスタロッチー (注93) 参照) に会い、決定的な影響を受けた。内面的には超越的な神と自然と人間とを統一的にとらえる。彼は教育の原理として自己活動の原理, 労働の原理, 社会の原理の3つを提唱し、個人の発達と人類の発展とを相互媒介的に考えた。は童の作業や遊びは個人の発達の問題であることに止まらず、人類

の発展に連なるものと評価される。

- 95) フォン・マーレンホルツ・ビュウロー (Bertha von Marenholtz Bülow 1810-1893) : フレーベル (注96) 参照) の設立した幼稚園の経営に多大な援助をしたばかりではなく、 フレーベルの業績を世界中に広めようと自分の生涯をかけた。
- 96) ケイ・シャトルワース (Kay Shuttleworth 1804-1877) : 医師でもあり、救貧法行政官であった。 ナイチンゲールの友人であるチャドウィック (注40) 参照) は彼の友人でもある。
- 97) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p31.
- 98) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), pp32-33.
- 99) 聖別 : 何の誓約も伴わない教会における厳粛な祝福を意味する。
- 100) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), pp33-3.
- 101) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p3.
- 102) Florence Nightingale (1851) : 前掲書 1), p34.
- 103) Martha Vicinus & Bea Nergaard Edited : 前掲書53), p30.
- 104) フリードリッヒ・エンゲルス (Friedrich Engels 1820-1895) : ドイツの社会主義者。
- 105) Friedrich Engels (1884), 戸原四朗訳 : 家族・私有財産・国家の起源, 岩波文庫, 2006.